

「子どもの薬を創る会」第4回セミナー

日本薬理学会後援セミナー

超低出生体重児の救命と薬剤、そして長期予後

長野県立こども病院 院長 中村 友彦 先生

日時：2022年10月13日（木）17:55 - 18:55

形式：オンラインセミナー

参加費：無料

参加方法：下記 URL から10月12日（水）までに事前参加登録をお願いします。

URL: <https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZEqc-yvqjMuHdb00FGV7SnB5sfaf9YYy9HI>

登録後、ミーティング参加に関する情報の確認メールが届きます。

問い合わせ先：信州大学医学部分子薬理学教室 山田 充彦 (pediatpharm@gmail.com)

1. 超早産児（在胎24週未満）の児の短期的予後
長野県立こども病院の後方視的な検討では2011-18年に入院した在胎22週と23週の生存退院はそれぞれ72%、89%であった¹⁾。
2. 超低出生体重児と薬剤
新生児呼吸窮迫症候群に対する人工サーファクタント療法の有効性が日本のRCTで証明された²⁾。生後早期の吸入ステロイドのRCTでは、重症化慢性肺疾患を予防する効果が証明できた³⁾。無呼吸発作に対するカフェインもEBMで評価されている⁴⁾。また、無呼吸発作に対するドキサプラム、未熟児貧血に対するエリスロポエチン、未熟児網膜症に対する抗VEGF抗体など、新生児投与が認められている薬剤もあるが、使用頻度の高い循環作動薬、抗けいれん剤などは未承認薬が多い。
3. 超低出生体重児の長期予後
最近2003年-7年出生の在胎28週未満の早産児を対象とした。青年期（14~18歳）の呼吸器症状の有無、喘息罹患率、QOLに関するアンケート調査をおこなった。その結果によると青年期の呼吸器予後は悪くなく、家族、本人ともにQOLに満足している結果であった。
4. 今後の課題
生存が厳しかった超早産児の救命率が上昇してきた。青年期・成人となってもQOLの高い生活がおくれるように、新生児医療は進歩していかねばならない。

【参考文献】

1. Yanagisawa T, et al. Am J Perinatol 2022 Feb 22. (DOI: 10.1055/a-1779-4032)
2. Fujiwara T, et al. Pediatrics 1990;86:753-64
3. Nakamura T, et al. Arch Dis Child Fetal neonatal Ed. 2016;101:F552-F556
4. Abushanab DAE, et al. Pediatr Drugs. 2020;22:399-408



[ここに入力]